

私たちが住んでいる地域の
人権課題って何だろう。

地域みんなが人権について
自分事として学べるといいな。



「地域のひと・もの・こと」を
教材とした人権教育がしたいな。

当事者の方々と交流を深めながら
学習していきたいな。

地域リーダー
(地域における人権教育推進者)

人権教育リーフレット いまここから 自分から 2

～地域のひと・もの・ことをいかして～

「真っ暗闇の中に立つ」(松本市里山辺地下軍事工場跡)
—その瞬間、心の交信がはじまる！

松本市里山辺地区の金華山(きんかざん)。盆地に突き出た岬のような小山の地下に、総延長1kmにおよぶ地下壕が張り巡らされています。かつては自由に出入りできたようですが、現在は壕の入口が私有地となり、許可が必要です。そのため、壕の存在を知らないという人は多いでしょう。

ここが「里山辺地下軍事工場跡」です。終戦間際の昭和二十年(1945年)、旧軍(陸軍航空本部)により、三菱飛行機製作所の部品工場として掘削されたと考えられています。

この地下工場で、多くの朝鮮人らが危険で過酷な労働を強いられたと言われています。〈「人権つうしん」44号より〉



【第三次とりまとめ】^(注)では、効果的な学習教材の選定・開発について、次のように示しています。

人権が尊重される社会づくりを自らの問題としてとらえ、自ら考えることができるようにするなどの教育効果を高めるため、身近な事柄を取り上げたり、児童生徒の興味・関心をいかしたりするといった教材の内容面での創意工夫を行う。

効果的な教材例として、「地域の教材化」「外部講師の講話やふれあいの教材化」「保護者や地域関係者と共にする教材」「歴史的事象の教材化」「教材を通して、よりよい出会いをつくるための教材」などがあげられています。

^(注) 平成20年に文部科学省から公表された「人権教育指導方法等の在り方について【第三次とりまとめ】より

地域ぐるみの実践(松本市) —学校における取組より—

この「里山辺地下軍事工場跡」を教材化して、地域と学校と家庭が一体となって学習を進めていこう！



大規模な地下壕を掘削するのは、危険な重労働でした。現在のように重機はなく、削岩機でダイナマイトを仕込む穴を空け、爆破しては手作業で岩を削り、出た「すり」を運び出していました。この重労働に従事していたのが、主に当時植民地だった「朝鮮人」と言われています。

こんなふうに学習したい！

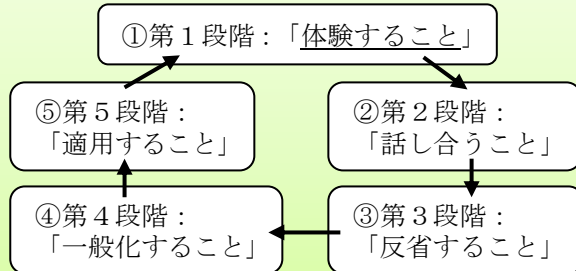
- ① 地域教材(地域のひと・もの・こと)に出会い、ふれあう「**実体験**」を通して、はっとしたり、心をふるわせたりするような学習をしたい。
- ② 地域教材を通して感じたり考えたりしたことを身のまわりの人たちと気軽に「**対話**」できるようにしたい。また、地域・学校・家庭において、みんなの共通の話題にしていきたい。
- ③ 地域教材との交流をもとに、自分の見方や考え方、生き方やあり方について「**ふり返り**」たい。
- ④ 日常的に起きている様々な事柄と「**関係づけて**」考えていけるようにしたい。
- ⑤ 地域教材から学んだことを「**活かす**」ながら、いま・ここから・自分から行動したい。

人権教育の指導方法の工夫

【第三次とりまとめ】「体験的な学習」に関して

個々の学習者の体験をはじめとして、他の学習者との協同作業としての「話し合い」、「反省」、「现实生活と関連させた思考」の段階を経て、「自己の行動や態度への適用」へと進んでいくと考えられます。

参考：「体験的な学習」に関する学習サイクル
(指導等の在り方編 P.28)



キーワード ~感じ 考え 行動する学びへ~

- ①**実体験** ②**対話** ③**ふり返り** ④**関係づける** ⑤**活かす**

① 実体験

〈松本強制労働調査団の支援により初めて地下壕を訪れた子どもたち〉

地下軍事工場跡を見学。五感を通して体感。



いつ、だれが、何のために、どのようにして掘ったのかな。

自作資料『闇を掘り進んだその先には…』(P.2)を読む。

実体験(現地視察)や資料を読み語り合うことを通して、過酷な労働を強いられ、不当な人権侵害を受けていた当時の朝鮮人たちの悲しみや苦しみに寄り添う姿が期待できます。



地下壕を掘っている時って、どんな気持ちだったのかな。



「闇を掘り進んだその先には…」

〔松本強制労働調査団の調査（当事者の証言等）を参考にしながら作成した自作資料です。〕

発破（はっぱ）と同時に、むき出しの岩壁に取り付けた灯り通りの青白い炎が、ぐらぐらと激しく揺れる。狭いトンネルの中を、ダイナマイトの爆発による衝撃波が、中の空気を叩きながら駆け抜けたのだ。

すぐに恐ろしい爆音がやってくる。空気がびりびりと震えるのがわかる。トンネルの角を曲がって跳ね返りながら、その大きさを増してこちらに迫っている。恐ろしい。

となりにいる仲間が大きく口をあけて、声のかぎりに叫んでいるようだ。そうでもしないと音圧で鼓膜が破れてしまう。私は両手でつぶれんばかりに耳を抑え、膝に顎をつけて赤ん坊のように丸まりながら、息を止めぎゅつと目をつむる。来た。

爆音はまるでむちのような鋭さで背を叩き、体中のひふをびりびり打ちながら、暗いトンネルの向こうへと走りぬけていく。

ほつとしていゝひまはない。さらにその後ろを、大量の粉じんがどつと走りこんでくる。粉じんとはいって、石つぶても混じっている。今度は刺すような痛みが背中を襲う。私も大声で言葉でない言葉を叫ぶ。大波にのまれた小舟のように、もみくちゃにされている。目も開けられなければ息もできない。思わずオモニ（※韓国語で「お母さん」）の顔が浮かび、「助けて！」と叫びたくなる。体が震える。

やつと体にかかる圧が抜けた。恐る恐る目をあける。でも、じつとしてはいられない。粉じんの後をさらに追いかけるように、現場監督の怒号（どごう）がやってくるからだ。

「よし、行け！、かかれ！」

現場監督が見えない角から叫ぶ。とたんに私たちは「わっ」と飛び出し、いまだ粉じんがおさまらない茶色い霧に包まれた向こうへ、ざくざくの岩に足をとられながら、駆け出す。ある者は手に先の丸まったシャベルを、ある者はもっこを持ち、足元にかすかに見えるトロツコのレールから目を離さないようにしながら、真つ暗なトンネルの奥へとよろめきながら駆けていく。

カンテラ（※手提げの照明器具）の弱い光に照らされた現場は、発破で砕かれた大小の岩がった岩だらけだ。10〜30センチ角ほどの岩のかけらを日本語で「ずり」と言うのだと、私より早くこの現場に来た仲間から教えられた。「まるで石器のようだ」と思ったのを覚えている。トンネルの先端は直径が1メートルのくぼみになっているが、ほとんどずりで埋まっている。くぼみに最初に取りついた者が、腹ばいに近いような格好で、ずりを上から崩し、掘り出す。激しく咳き込む声が響く。

だが、そこにいる数人は無言だ。私も押し黙ったまま、折れかかったスコップ

を「ガシャガシャ」と振るって、ずりをかき出す。姿勢が苦しく、うめき声がでしいう。周りには、素手に血をにじませながら、大量のずりをもっこに詰めている仲間がいる。いっばいになると50⁺。これをやせこけた背中に背負うのだ。

監督が今頃になってやってきて、後ろで目を光らせている。手抜きはできない。次はどんな現場に行かされるかわからないからだ。

ずりを背負った仲間が、うめき声をあげながら歩き出す。足をとられて岩壁にぶつかると、暗い明かりにうつつすらと血の跡が光る。私は「明日は自分だ」と、暗い気持ちで見送る。とたんに、

「おい！ぐずぐずするな！」

と、監督の怒号が飛んでくる。あわててスコップを振るう。

空のトロツコが押されてきて、別の者がかき出したずりを放り込む。「ガラガラ、ザラザラ」と乾いた音が響く。私も「のどがからからだ」と気づく。

トロツコはすぐにいっばいになる。重さは全部で1トナという。それを4人で押していくのだ。うなり声とともに、トロツコはゆっくりトンネルの出口へと走り出す。レールに響く音はやがて強さを増し、すごい勢いで走っていくことがわかる。しばらくすると「ザザン」という音が反響してくる。ずりを外にあげたのだ。「この狭いトンネルをあんな勢いで走って、いったい何人がけがをしているのだろう」と思う。だが、飯場（はんば）（※土木工事や建築現場での作業員の食堂・宿泊施設）では誰もその話はない。ときどき、見えなくなる仲間がいることで、何が起きているかは察しがつくからだ。

私はひたすらずりをかき出す。足元のざくざくの岩に、足がすくわれる。支給された地下足袋（じかたび）はとつとにすりきれてしまった。自分で作ったぞうりも半分ちぎれかけ、足の裏は傷だらけだ。軍手もとつとに破れ、代わりもないから手も傷だらけだ。それでも必死に掘る。かき出す。

のどの渇きとともに、空腹が襲ってくる。もう何か月も米を口にしていない。コウリヤン（※イネ科の雑穀）のおかゆはまるでにごったぬるま湯で、器を持ち上げるとふちからこぼれる。消化も悪いから、無理やりのみくだしたあと、腹をこわすだけだ。しかし、ほかに食い物もない。仕方ないのだ。

もう、こんなことを何か月繰り返したろう。交代制で昼も夜もなく、どこにも行くことができず、そもそも言葉もわからなければ字も読めない。給料も「貯金してある」と言われ、一度ももらったことがない。

故郷の親は無事だろうか。自分が生きていることを知っているだろうか。

「帰りたい。帰りたい。帰りたい…」そればかりを思う。

今の私はまるでモグラのようだ。どこまで掘れば終わるのだ。この戦争が終われば終わるのか。そうすれば国に帰れるのか。それとも、このままこの見知らぬ国で、ろくに陽を浴びず土になっていくのか。あ、この先、どれほど苦しめばいいのだろうか。

（H25人権教育指導方法等研究会作成）

② 対話する

【学習のねらい】 相手と語り合う中で、自分の考えをすり合わせることができる。

仲間との対話

こんなにも身近に、深刻な人権侵害につながる「強制労働」もあったなんて驚いたな。

松本強制労働調査団の方との対話

歴史的事実や背景について正しい理解と認識を深めていくことを大切にしていきたいな。

当事者との対話

当事者の人たちが、自分の中に抱え込んできた「おもい」ってなんだろう。

地域のお年寄りとの対話

「地下壕の強制労働のことは何も話したくない」って言っていただけど、どうしてだろう。



当事者への「聞き取り証言」より

かみそりのようになった石を踏んで仕事をするので、地下足袋はすぐ切れ、わらぼうしは、半日もたなんだですね。裸足が多くて、足からいつも血が出ていました。下痢をして腹が痛くても、休むことはできませんでした。買い出しに行っても、朝鮮人には売ってくれませんでした。当時のことは、思い出したくもないです。(松本強制労働調査団による聞き取り調査より)



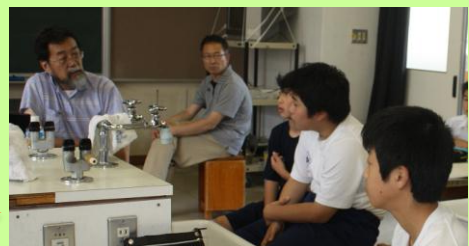
当事者の中には、頑なに語ろうとしない人や、話しているうちに泣き崩れる人がいたと聞きました。当時の悲惨な生活やつらい経験によって受けた心の傷跡が、今なお消えずに残っているんだなあと思いました。

③ ふり返る

語り合ったり、ふり返ったりしながら「自分」を見つめてみましょう。

【学習のねらい】 これまでの自分の生き方やあり方を見つめ直すことができる。

当時の強制労働や深刻な人権侵害の事実と、現在の自分たちの生活の様子を比較しながら、偏見や差別意識についてふり返ってみました。



過去の出来事に限らず、今の私たちの中にも、在日韓国・朝鮮人をはじめ、外国人に対する偏見や差別意識があるかもしれない…。

④ 関係づける

【学習のねらい】学習したことと日常の事象とを関係づけて考えることができる。

事例1

先週、近所のアパートに、在日朝鮮人の家族が引っ越してきたでしょ。「地域の集会とか行事とかが心配だ。」って、大人たちは話しているみたいだけど、みんなはどう思う？



私は、声をかけてあげたいけど、ちょっとドキドキするなあ。

読み物資料 (P.5) にふれて…

「大切な名前」 長野朝鮮初中級学校中級部(H24 年度2 学年) キムヒャンジン 金香心さん



地域の中から偏見がなくなっていくといいな。



やっぱり私は、相手の気持ちを理解することからはじめたいな。

事例2

ぼくたちのクラスに転校してきた在日韓国人のAさんと早く仲良くなりたいなあ。でも、どうしたらいいかなあ。何して遊んだら、Aさんは喜んでくれるかな？



Aさんは「花札」が得意って聞いたよ。やってみようよ。

～花札をやってみて (Aさんの語り)～

韓国では「花札」で遊ぶ習慣があります。私は、父から教えてもらいました。父は祖父から教わったそうです。祖父は日本人から教わったそうです。昔、韓国が日本の植民地だった時代に、韓国人は、韓国の遊びをすることを許されず、日本の遊びを覚えるしかなかったそうです。今日は、みんなが「花札」を選んでくれて嬉しかったです。



これからもAさんの気持ちを感じながら生活していきたいな。

「大切な名前」

長野朝鮮初中級学校中級部
(平成二十四年度二学年)

金 香 心 さん

私は在日朝鮮人四世の「キムヒヤンシン」です。日本で生まれ育ったけれど、自分の国の言葉や文化を学ぶために朝鮮学校へ通っています。私の家から学校はとても近いし、通学時も安全で、何の心配もなく通っています。

私が小学生の時のことです。私は、毎日学校から帰ると近くの公園で遊んでいました。私には日本の友達がないので、公園で楽しそうに遊んでいるグループを見つけると、

「わたしも入れて！」とか、
「一緒に遊ぼう！」

などと声をかけました。すると最初は、仲間に入れてくれました。それから少し経って、

「ねえ、名前教えて！」
と言われたので、

「キムヒヤンシンだよ」と答えました。

「キムヒヤンシン？ 変な名前。どこの学校へ通っているの？」

「朝鮮学校だよ」

「朝鮮学校？ ふうん」

そして、

「じゃあ、朝鮮語で話してみよう。うしなかつたら、遊んであげない」と言いました。私は、その時、

「いや、そんなこというなら、遊んでくれなくてもいいよ」
と言って家に帰りました。私は、名前や学校が違うだけで、なぜ仲間はずれにするのだろうと思いました。

それからずっと、私が公園に行くたびにそのグループの人たちは、私を睨みました。遊具を使わせてくれなかったり、声をかけても無視しました。そして、とうとう



公園に来るいろいろな人たちが私の姿を見るたび、こそこそ悪口を言うようになりました。私は、それでも公園に行つて、そのグループの人たちと会うたびにケンカをしていました。

「わたし、朝鮮人きらい！」

と、吐き捨てるように何度も言われました。私が朝鮮人であることは、父母が朝鮮人なので、変えることができない事実です。それをもって「きらい！」と言われても私にはどうすることもできません。

だから、「朝鮮人きらい」というのは、間違いなく偏見です。

ある日、私はどうしても友だちがほしくて、初対面の女の子に名前を偽って教えました。

「私の名前は、金村かおりだよ」と。金村とは、おじいさんの通名です。その子と私はすぐに仲がよくなりました。公園でいつも一緒に遊びました。が、どこからか私の本名を聞いてきて、

「あんた朝鮮人なんですよ。もうあなたなんかと遊ばない。うそつき！」ときっぱりと言いました。

私は、家に帰つてそのことを母に話しました。すると、母は、とても悲しそうな顔をして、私に言いました。

「朝鮮が植民地だった頃、まず名前や言葉を奪つていったのよ。朝鮮をなくすためには、朝鮮の人が一番大切になっているものをなくすのが一番いいと思つたのでしょうね。名前を日本名に変えろと言われた時に、それは絶対にできないといって、命を絶つた人もいたのよ。自分の名前を偽るといふのは、自分自身を大切な貴重な存在だと思つていないと言うことだから。そして、あなたの名前は、家族みんな、あなたにどんな人になつてほしいか、一生懸命考へてつけた名前なのよ」

私は「キムヒヤンシン」というと、すぐに朝鮮人と分かるのが嫌で、名を偽ってしまったのでした。私は深く反省しました。そしてそんな自分がとても恥ずかしかったです。私のしたことは、自分自身の存在を否定することだったからです。自尊心を持ってないことが、人間にとっては一番悲しいことだと母は教えてくれたのでした。自尊心を持つてこそどこでも自分らしく堂々と生きていきます。

私の名前は、私のすべてを表しているだけでなく、家族の願いも込められていました。朝鮮人であるか、日本人であるかということは人間の判断にはなりません。人間の判断の基準は、どう生きていくかということだと思います。

私は、病院や美容院などにいく時、自分の名前をきかれる機会がたくさんありますが、そのたびに堂々と「私はキムヒヤンシンです」と答えます。

私は、どんな人に対しても偏見を持たず、その人のありのままを受け入れて、他人の自尊心を傷つけることがないように接していきたいです。

事例3

国民栄誉賞を初めて受賞した王貞治（おう さだはる）さんは、早稲田実業時代に、チームメイトが出場した国民体育大会に出られなかったそうだよ。王選手は日本で生まれたのに、中華民国国籍（在日中国人）だったから。でも、今は出られるようになったそうだよ。王選手はその時どんな気持ちだったんだろうね。



日本で生まれても、国籍がないとできないことって他にあるのかな。

公務員の中には、日本国籍がないと就けない役職があるようだよ。
国・県・市町村の議員、知事、市町村長などの選挙権もないそうだよ。



在日外国人はどう思っているんだろう。実際に在日外国人と交流して、今の思いについて考え合ってみたいな。

⑤ 活かす

【学習のねらい】 学習してきたことを具体的な態度や行動にあらわすことができる。



地下壕には、当時の人たちの営みやおもいが染み込んだ足跡（そくせき）が残っていました。「共に生きる社会」を実現するためにも、その足跡を残していきたいと思っています。《子どもたちの追究から》



〈地下壕内を調査する様子〉



当時の強制労働による朝鮮人などに対する人権侵害の真実に迫るために、松代大本営地下壕の現地視察をし、里山辺地下壕の歴史的事実と比較しながら学習を進めていこう。《Y先生の学習計画より》

地域ぐるみの学び合い（学びの共有化）



私たちは、この学習をきっかけにして、語り部として地域の人たちに伝えたり、私たちの後の世代にもつなげたりしていきたいです。そして、多文化共生の社会づくりに向けて、自分にできることをしていきたいです。《子どもたちの感想より》

地域ぐるみの学び合い（学びの共有化）

私が推進します！



地域リーダー

【学びの共有化】 地域に根ざした人権課題の一つとして、「外国人の人権」に焦点を当て、住民が抱えている事実や背景について学び合い、「多文化共生」の地域づくりをめざします。「地域教材（＝里山辺地下軍事工場跡を教材化したもの）」を起爆剤（きっかけ）として、人権学習を展開します。

《学校》

◇小学校（高学年）から高等学校までの系統的な学びを構想しましょう。

小学校（高学年）

＊「天冠（県宝・松本市桜ヶ丘古墳より出土）」から解き明かす渡来人の歴史

中学校

＊「地域教材」から学ぶ歴史的背景
＊副教材「あけぼの」を活用した学習

高等学校

＊「松代大本営」から学ぶ強制労働による人権侵害の真実
＊今を生きる在日韓国・朝鮮人との交流活動

地域リーダーが中心となって進める「学びの共有化」

※地域リーダー（市町村の人権教育推進者）が学校・家庭・地域の学び合いをコーディネートします。

《家庭》

◇「小さな社会」としての家庭の役割を自覚し、「外国人の人権」に関する話題を共有しましょう。（家庭内の対話）

- ＊「地域教材」に関すること
- ＊近所の外国籍住民の人権に関すること
- ＊多文化共生の絵本に関すること

《地域》

◇学校での学習の様子を参観したり児童生徒も参加できる学習講座やイベントを企画したりするなど、学び合う機会を大切にしましょう。

- ＊「地域教材」に迫る学習講座
- ＊「渡来人祭り」のイベント

学校・家庭・地域が、共通の「地域教材」を拠り所に学び合うことを通じて、地域ぐるみの人権教育を推進するための下地づくりをしましょう。

取組の具体例（松本市）

～コラム～ 多文化共生への取組（市町村の実践より）

木島平村では、外国から来られ居住している方を対象に「ふれんどりい日本語教室」を定期的に行っています。また毎年、その教室に来られている方の母国料理を地域のみなさんと作って会食する「人権ふれあい交流会」を開催しています。小さい子どもから大人まで多くの地域の方々が参加しています。外国から来られた方たちと料理名や料理方法などをきっかけに、楽しい会話が生まれています。



こんなに楽しい交流会とは思わなかった。外国から嫁いで来られた方も、日本語が上手でびっくりした。楽しかったので来年もぜひ出たい。



参加した一人暮らしの70歳代の方



参加した小学生のMさん

最初にマレーシアのパンミといって小麦粉や水、バターをまぜる料理を作りました。みなさんが優しく教えてくれたのでよく分かりうれしかったです。ふれんどりいのみなさんと楽しいお話ができ、マレーシアとフィリピンの文化に少しふれることができてよかったです。もっとマレーシアやフィリピンのことを知りたくなりました。

《人権教育リーフレットの作成にあたって》

里山辺地下軍事工場跡を題材にした事例や関係資料等の編集・掲載については、松本強制労働調査団、松本市立山辺中学校、松本市立旭町中学校、その他関係者の皆さまのご協力をいただきました。